

II 自由論文

薬物使用の質的研究における説明と記述

—シンボリック相互作用論における科学性・合理性とディスコースの分析—

佐藤哲彦

熊本大学

本稿は犯罪の質的研究において科学性・合理性を保証する説明方法に関して論じたものである。ここではとくに、シンボリック相互作用論にもとづく薬物使用の質的研究における代表的二研究を取り上げ、そこで採用されたデータ収集と説明の方法が、どのような形で科学性・合理性を保証し得たのか、あるいはし得なかったのかを論じている。そして最後に、科学性・合理性を保証し得なかった方法における問題点を克服するための新たな方法を提案している。具体的にはまず、リンドスミスによる分析的帰納にもとづいた阿片依存の研究を取り上げ、この研究が、調査対象者との会話やインタビュー、医学文献にもとづいた質的な研究であるとはいえ、仮説演繹法を用いたものであることが明らかにされる。そのことにより、科学的な質的研究の方向の一つが示される。次に、ブルーマーらによる記述的な薬物使用者研究を取り上げ、この研究が、同じく調査対象者へのインタビューや彼らとの討論にもとづいたものではあるものの、調査対象者の世界を合理的には説明できていないことが明らかにされる。そして、その問題を乗り越えるために、ディスコース分析の手法を導入することが提案される。

キーワード：薬物使用，シンボリック相互作用論，ディスコース分析

1 はじめに

犯罪研究が科学的、あるいは少なくとも合理的であるためには、どのような手続きが必要なのだろうか。このような問いは、ほかのさまざまな古くて新しい問いと同様、われわれが犯罪を研究する際に常に立ち返るべき問いであるに違いない。しかもおそらくは、いわゆる質的方法を用いて調査研究を行う場合に、とくに意識されなければならないものでもあろう。というのは、質的方法はいわゆる量的方法の場合とは異なり、一見して科学的・合理的であることを保証されているわけではない、一般的には思われている節があるからである¹⁾。しかしだからといって、質的方法であれば科学的・合理的でないというわけではないことも、また確かである。たとえば、質的方法によ

って科学性・合理性を保証しようとする努力の一端は、犯罪や社会問題の調査研究を中心的に志向したシカゴ学派とその伝統を汲む研究にみることができる。したがって今日その伝統を振り返ることで、犯罪研究の科学的方法・合理的方法を再考してみることも、いわゆる質的・量的の違いを越えて、現在の意義を持つに違いない。

そこで本稿は、シカゴ学派の伝統を汲むシンボリック相互作用論にもとづいてなされた薬物使用に関する代表的な質的研究を、とくに科学性・合理性という観点から考察し、それらの研究の説明と記述²⁾にみられるいくつかの特徴とその方法論上の問題点を明らかにするとともに、それらの問題点を克服するための分析方法について論じてみたい。とくに本稿では、アルフレッド・リンドス

ミスによる阿片系薬物の依存研究と、ハーバート・ブルーマーらによる薬物使用者研究に焦点を絞り、検討を行っていくことにする。これら二つの研究に絞り込むのは、後に見るように、シンボリック相互作用論にもとづく薬物使用研究方法の二つの系列を代表しているからでもある³⁾。

2 シンボリック相互作用論と薬物使用研究

そこでまず最初に、薬物使用研究について簡単に述べておきたい。わが国における薬物使用の社会学的研究は、数度にわたる覚せい剤の流行が叫ばれながらも、いまだ十分に展開されているとはいいがたい研究領域である。一方、英米においてこの領域は、逸脱研究や社会問題研究において、必ずといっていいほど論じられるトピックの一つとなっている。とくにシカゴ学派の伝統を汲むシンボリック相互作用論においては、そのパースペクティブにもとづく研究の当初から、この領域を対象としていた。

ただしいわゆる初期シカゴ学派においては、薬物使用の問題はそれほど重要なものとしては扱われていない⁴⁾。これには薬物使用という社会問題の成立と、都市問題を志向した初期シカゴ学派との出会いが関係している。というのは、初期シカゴ学派がすでに最盛期を過ぎたとも考えられる1930年代になってからようやく、薬物使用は傷病兵士の問題や特定の人種に伴う問題ではなく、一般的な社会問題だとして認知されだしたに過ぎないからである。しかしながら30年代も中盤以降、薬物使用は重要な社会問題の一つとして位置づけられ始め、初期シカゴ学派のモノグラフでは、1939年出版の生態学的研究の中によろやく一部登場したのである (Faris and Dunham, 1939: Chapter 6; 金子, 1997: 535)。

一方、初期シカゴ学派の研究方法を基礎にしな

がら、シンボリック相互作用論の構築に大きく貢献したのがアルフレッド・リンドスミスである (佐藤, 2001)。彼は、ブルーマーの指導の下で阿片依存の調査研究を始め、やがて分析的帰納 (analytic induction) によって、「依存がどのようにして起きるのか」ということを解き明かした「薬物依存の社会学理論 (a sociological theory of drug addiction)」を構成した (Lindesmith, 1938, 1947, 1968)。分析的帰納とは、少数の事例にもとづいて初期の仮説を構成し、さらなる事例研究において、仮説には当てはまらない否定的証拠を探すことで仮説の検証を行い、これを繰り返すことで仮説を洗練していく理論構成方法である。これはシンボリック相互作用論の系譜に受け継がれ、たとえば後にハワード・ベッカーによるマリファナ使用者の調査研究でも使用されることになるが (Becker, 1963=1978: 第三章)、その有効性を最初に示したのがリンドスミスである (Colomy and Brown, 1995: footnote 25)。

3 リンドスミスと依存の説明

ではどのようにして「薬物依存の社会学理論」は構成されたのか。彼の場合は、シカゴの施設外 (street) における依存者たちの観察と、彼らとの会話にもとづいて初期仮説を構成した。そしてその仮説を、インタビューで検証して再構成し、さらにインタビューと文献で最終仮説、すなわち依存理論へと組み立てていった (Lindesmith, 1968)。

その際、彼がまず問題としたのは、同じ阿片系薬物の使用者のなかで、どうしてある人は依存になり、他の人はならないのか、ということである。この問いに対して彼は、自分で摂取している薬物が何であるのかを本人が知っていれば依存になり、そうでなければ依存にはならない、という初期仮説を採用して応答した。しかしながら、インタビューした調査対象者が、自分がモルヒネを使用し

ていることを知っていたにもかかわらず、その時点の連続使用では依存にならなかったと話したことにより、この初期仮説が否定され、新たな仮説構成が必要とされることになった。そこで新たに提案された第二次仮説は、「人が依存になるのは、自分が経験している退薬の苦痛の意味に気づいたり感じたりしたときであり、もし退薬の苦痛に気づかなければ、他の理由にかかわらず、その人は依存にはならないということ」(Lindesmith, op.cit.: 8)であった。そしてさらにこの仮説を検証することにより、最後に以下のような最終仮説すなわち依存理論が構成されたのである。

(引用1)

依存は、退薬の苦痛が適切に理解あるいは解釈されたのちに、すなわち、その苦痛が阿片使用習慣のまわりに発達する言語的シンボルと文化的パターンに関連した形で個人に表されたのちに、その苦痛を緩和するために阿片を使用したときにのみ起こるのである。(Lindesmith, op.cit.: 191)

4 仮説演繹法としての分析的帰納

では、説明と記述という観点からすると、彼のこの理論構成の方法、言い換えればデータ収集と、その説明はどのような特徴をもっているのだろうか。

彼の採用したデータは比較的多様であり、データ収集の時点で科学性を保証しようという作業は、それほど強くは見られない⁵⁾。というのは、データ自体を、何らかの枠組みに沿ってあらかじめ限定していたのではなく、あるいはサンプリングなどを行ってデータの妥当性を高めるのでもなく、彼は会話・インタビュー・文献などさまざまなデータを用いているからである。むしろ彼が問題としたのは、調査対象者の語りの信憑性である。この点について彼は、「約50人の依存者にインタビ

ューを行ったが、それらはお互いに信頼できるほどのインフォーマルで仲のいい関係を取り結ぶのに十分な期間をかけて行ったものである」(Lindesmith, op.cit.: 5)としている。すなわち、調査対象者の語りが信じられるというリンドスミス自身による判断が、データの信憑性の基準となっている⁶⁾。

しかしながらその一方で、彼は、初期シカゴ学派の質的研究のように、いわば例示的・羅列的にデータを用いるのではなく、理論構成の過程においてデータを「特定の形に編成」し、仮説構成とその検証のために用いている。この場合「特定の形の編成」とはすなわち、データを仮説検証との関係において時間的に配列することを意味する。したがって、彼の方法が初期シカゴ学派と異なっており、その意味で科学的説明へと一歩踏み出すのは、このような理論構成におけるデータの使用方法、すなわち説明方法なのである。

ところが、その説明は、実は観察データやインタビュー・データにもとづく帰納によって可能なわけではない。というのは、分析的帰納は一般的には帰納として考えられているが、実際には帰納ではないからである。帰納であれば、個々のデータそれぞれは、個々の事例の羅列であって、一つのまとまりとして有意味にはならない。それらを有意味な一まとまりのものとして見るためには、常に何らかのパースペクティブが必要なのである(Popper, 1972=1974: 第一章; 野家, 2001)。それは別のいい方をすれば、観察の理論負荷性と呼ばれるものでもある(Hanson, 1969=1982: 第9章)。つまり分析的帰納は、一見その名ゆえに帰納であると誤解されるが、それはあらかじめ何らかのパースペクティブがあってはじめて成立する仮説演繹法、すなわち実証科学の標準的方法なのである。

それはリンドスミスの説明の仕方からも具体的にみてとることができる。たとえば彼は、‘get

hooked' (引っかかる) といった、施設外の阿片系薬物使用者が使用している苦痛を伴う生理的経験を指示する言葉を、退薬症候そのものを指示するものとして位置づけている。言い換えるのであれば、'get hooked' を、彼自身の手で「退薬症候を示す言語的リソース」として、withdrawal distress (退薬の苦痛) と同じものとしてカテゴリー化しているのである。これは調査者の側が作ったカテゴリーであり、このような作業自体が一つの概念構成となっていることは明らかである。そしてそれを組み込んだ形で仮説構成を行っているのである。

したがって、彼の質的研究における説明方法の最大の特徴は、実は特定のパースペクティブとそれにもとづいた仮説構成、さらにはその仮説にもとづく演繹的検証である。彼の場合、デューイとミードを参考に、行為の因果連関を過程というパースペクティブのもとに捉えていた (Lindesmith, 1981)。つまり、原因と結果はいずれも相互作用の過程として位置づけられるものであって、結果と呼ばれているものと原因と呼ばれているものは、問題として捉えられている過程全体における特定の段階や局面として位置づけられるのである。このようなパースペクティブにもとづいて、彼は、依存の発端を一連の過程として捉え、さらには依存さえも過程として捉えた。したがって、一般化すれば、言語的リソースの存在 (退薬症候を示す言葉)、それにもとづく洞察 (退薬症候の認識)、洞察にもとづいた行為 (投薬)、行為による洞察の正しさの証明 (因果関係の確立)、という過程として、さらにはその過程それ自体の発達過程として、ある行為 (薬物使用) の継続性 (依存) を理論化したのである。

また付け加えるのであれば、そこには、間接的にのみ観察されるデータ、たとえば一般的な心理学的事象であるパーソナリティといったものは見

当たらない。あくまで、直接的に観察可能なデータによって理論が組み立てられている。逆に言えば、それゆえに反証が可能になっている。その意味では、リンドスミスの理論構成において着目すべきは、言語的リソースと行為といった「観察可能なもの」の間の「反証可能な関係」でもある。これはベッカーのマリファナの継続的使用に関する研究にも共通する特徴である (Becker, op.cit.)。その意味で、リンドスミスによって採用されたデータ収集と説明の方法は、シンボリック相互作用論による質的研究において、一つの系列をなす科学的説明方法として位置づけられるだろう。

したがってこのような方法は、薬物使用の質的研究において科学性を保証するための一つの方向を示しているといえることができるだろう。ミード (Mead, 1917) やポパー (Popper, op.cit) のように、科学性の保証が仮説の反証可能性にこそあると考える限り、リンドスミスによる研究は方法的には質的ながらも、その科学性を保証しているといえることができるのである。

5 ブルーマーらによる薬物使用者世界の記述

一方、ブルーマーらによる若者を対象とした薬物使用者研究 (Blumer et al., 1967) は、リンドスミスによる研究とは異なり、行為を研究対象とするというよりはむしろ、薬物使用者自身の観点から薬物使用者の世界を描き出そうとしている。その際に彼らが用いたパースペクティブは、やはり過程に着目したものではあるが、むしろ自然史的観点を基礎においている。このような観点は、実は初期シカゴ学派でもスラッシャーらに用いられた伝統的なものでもある (Thrasher, 1927: part 1; 佐藤, 1997: 255-64)。

彼らの調査研究は、カリフォルニア州のオークランドで行われたもので、当初は若者の薬物使用

を止めさせるプログラムとしてスタートした。しかしながら、それが非常に困難なことであると分かったために、使用者らが薬物使用に深くコミットしており、薬物使用の問題のなさを事例を挙げて説明するなどして薬物使用の停止を選択しようとはしなかった様子を、使用者たちのインタビューをもとに記述しながら、彼らの世界を説明し、理解することを目指したものである。

その際彼らは、まず、さまざまな集団の中で薬物使用状況に詳しいとされている多くの若者たちを、重要なインフォーマント、すなわち彼らのいう「中心人物 (central figures)」として獲得し、彼らからデータを収集した。調査スタッフらは彼らと一緒にパーティや食事に出かけたり、お互いの家を訪問しあったり、トラブルの面倒をみるなどして友情を培ったとされ、さらに彼らのつながりから、インタビュー相手を広げている。また、彼ら「中心人物」を集めて討論会のようなものを開き、インタビュー内容の検証や、調査スタッフらが関心のある事柄について話し合ってもらなどしている。すなわち、データ収集を行う際に、データの信憑性を高めるために、親密な関係を結んだ上で単に率直で正直に語ってもらうばかりではなく、その語りを批判的に検討する機会を設け、さらにはインフォーマントたちが無自覚な経験的側面について語りだすよう促すために、チェック態勢を作ったのであった。このような作業が必要であったのは、薬物使用者たちが自分たちの身を守るために、外部の者から情報を隠したり、外部の者を欺いたりすることが常態化していたからである。

では具体的に、薬物使用者の世界とはどのようなものなのか。ブルーマーらによれば、薬物使用者の世界には二つの特徴があるという。一つは、その構成からして同質的ではないということ。すなわち、使用者の類型、使用パターン、薬物使用

に対する考え方、薬物使用のきっかけ、使用の発展経路、その後のキャリアなどの点で、さまざまに異なった使用者が見られるということである。もう一つは、薬物使用者の世界は継続的な流動性の下にあるということ。すなわち、特定の使用者が特定の集団に所属した安定した世界ということではなく、使用者たちがこの世界において、そしてこの世界から出て行くまで、さまざまな状況の中を経験し、さまざまな集団に属し、さまざまな自己イメージを作り出し、さまざまな状況の定義を発達させ、さまざまな協働活動に携わるということである。

したがって、使用者たちが薬物使用をめぐる生活に入り込んでから出て行くまでの過程の種類はかなり幅広く、それをすべてを研究することは不可能である。そこでブルーマーらは、薬物使用者たちによって認められている社会的類型の主たるものを同定し、その過程を分析したのであった。

そこで彼らを取り上げた社会的類型とは、「暴力系 (rowdy dude)」「クサ系 (pot head)」「スマート系 (mellow dude)」「ゲーム系 (player)」の四類型である。その場合、使用者たち自身がこれらを類別して認識する基準は、「暴力 (rowdy)」と「内省 (cool)」という次元とされ、「暴力系」は「暴力」次元に位置づけられる類型であるものの、残りの三類型は「内省」次元に位置づけられている。さらに、「クサ系 (pot head)」「スマート系 (mellow dude)」「ゲーム系 (player)」の三類型については、「クサ系 (pot head)」はマリファナしか使用しない、「スマート系 (mellow dude)」はそれに対してさまざまな薬物を使用し、「ゲーム系」は若者用の薬物の闇市場において供給者として振る舞い、金銭のために道具的に薬物にかかわる、といった区別がなされている。また、「暴力系」は、薬物使用者全体からすると少数派であるものの、通常は下層階級に見られ、他の薬

物使用者たちとは分離した存在であり、より深刻な非行活動へと至りやすいとされている。

このような社会的類型について、ブルーマーらは使用者たちのインタビューをもとに、それぞれがどのようなものであるのかを描き出しているが、彼らがとくに力を入れて説明しているのが「暴力系」である。ここではこの社会的類型の自然史的な過程を簡単に紹介して、その類型とのつながりにおいて、他の類型にも触れておきたい。

「暴力系」は、まず、典型的には下層階級出身の少年少女からその過程を始めるが、その少年少女たちの生育環境は暴力的で厳しいものであったとされる。そのような環境で育つ少年少女たちの中でも、とくに暴力的な少年少女たちが現れ、その環境にいる連中の暴力傾向を象徴するようになる。そしてそのような少年少女たちはその地域で「荒くれ」「トラブルメーカー」とレッテルを貼られるようになるが、彼らは彼らで、できるだけワルに見せるよう心がける。そしてその際に自分たちを震え上がらせるような年長者や大人のまねをすることになる。そのためにアルコールなどの薬物を手に取るようになるのであるが、やがてアルコールだけではなく、ボンド (glue) やガソリン、ライター・ガスなどの吸引も始めることになる。さらに、このような暴力的な少年少女は、暴力的で厳しい環境においてさえ周りから孤立し、そのために彼らだけの集団を形成することになるが、青年になると、なおさらその暴力傾向を周りに誇示するようになるという。

このような「暴力系」をめぐる状況の特徴として、ブルーマーらが挙げているのは、三点である。すなわち、まず第一に、周囲の同世代や大人たちが彼らにかかわりあいにないように彼らを遠ざけるために、彼らが、より一般的な生活の中で緊密な関係を取り結ぶことができないということ。第二に、薬物の密売者や他の社会的類型の使用者

が面倒を避けるために彼らとのかかわり合いを避け、彼ら自身は薬物のマーケットにはなかなか手が届かないということ。第三に、とくに警察に目をつけられやすいということ。そしてこれらの特徴が、やがて「暴力系」の発達過程に影響与えることが指摘される。というのは、確かに犯罪者へといたる過程もあるものの、「暴力系」の青年たち全員がそうなるわけではなく、残りの青年たちは、その類型を変えていくからである。

そのような過程の中で、ワルぶっていた若者が、自分の服装や外見、あるいは振る舞いを気にし始め、それがきっかけで変わっていくというのがブルーマーらの説明の一つである。たとえば、「暴力系」から内省的なスタイル (cool style) に自らを変えていくものもおり、これが別の社会的類型の出発点になっている場合もある。このような点について、ブルーマーらは、学校に行くための服装と外見に気を使う事例と、対象者の表現を挙げながら、以下のように説明している。

(引用2)

初期の暴力的段階から内省的段階への移行するのは、若者たちが述べるように、「肩の荷が下りた」あるいは「気づいた」結果である。これは服装や外見が気になるようになると始まるのである。(Blumer et al., op.cit: 27)

また、自分の内面を見つめて変化する事例については、インタビューにおける語りを挙げながら、以下のように説明している。

(引用3-1)

暴力的なありようをリードし、「ワル中のワル」であろうとしていた若者の中には、突然、自分の内面を深く見つめ、自分の外見や振る舞いの行き着く先に考えをめぐらせることを余儀なくさせら

れる者もいる。

(引用3-2)

「通りを歩けば、いつも、どの警官も俺のことを見てるように感じるんだよ、俺が荒くれっばかったから。店に行くだろ、で、金もって何か買おうと思っても、次の瞬間、俺の後ろに警備員が張りつくんだぜ。いやだね、もうこんな人生やっつけられないって。もう十分やっつんだから、もうこの段階から抜け出してもいいわけだろ、もう続けられないんだから、少しずつ変えていくことだよ。ワルぶるのはもういいよ、トラブルもいやだ。トラブルは山ほどあったんだから、あんただってもう止めるって言うよ。考えりゃそうなるよ、…他の連中も何年もそうだったから、全員がもう肩の荷を降ろしたんだよ。」(Blumer et al., op.cit: 28)⁷⁾

さらには異性との関係で、「暴力系」から足を洗う若者もいる。そしてこのような経過を経て、「クサ系」や「内省系」、あるいは「ゲーム系」などへとある種の方向転換あるいは転向を遂げていき、そこではまた別の過程を経ることになるのである。

6 記述と説明の合理性

すでに見たように、ブルーマーらの薬物使用者世界の研究は、リンドスミスの研究とは異なり、きわめて記述的なものである。しかしながらこのようなスタイルの研究は、実はシンボリック相互作用論の系譜における薬物使用者研究においては、リンドスミスやベッカーの研究よりもはるかに一般的である。たとえば、このブルーマーの調査スタッフにも属したサターの研究 (Sutter, 1966)、ブルーマーと同じくカリフォルニア大学バークレー校に所属していたキャリーらによる研究 (Carey, 1968; Carey and Mandel, 1968)、あるいはデイビスらによるヒッピーの研究 (Davis and

Munoz, 1968) など、いずれの薬物使用者研究も、ここで取り上げたブルーマーらの研究とほぼ同一のスタイルをとっている。すなわち、主としてインタビューの語りを記述し、それを説明することで明らかになる調査対象者の世界の研究である。

では、そのような研究方法は、説明と記述という観点からすると、どのような特徴を持っているのだろうか。

まずデータ収集について見てみると、彼らの研究においても、リンドスミスによる研究と同じように、データの信憑性ということを重視していることがうかがえる。それは端的に言えば、調査対象者が本当のことを話してくれているかどうか、というものである。それを重視しているがゆえに、インタビュー内容さえも「中心人物」たちの討論の場で検証していると考えられる。

ではそのようなデータを利用した説明はどうかであろうか。確かに彼らの研究は、リンドスミスの研究と同じように、観察、インタビュー、討論という形で、「観察可能なもの」のみをデータとして利用している。しかしながら、彼らは、インタビュー対象者によって認識されたカテゴリーを主として利用しているために、あるいは、(引用2)が示すように、語りの一部をそのまま用いているために、彼らの側で概念構成を行っていない。そのため、そこで得られたデータが、そのまま世界を描写したものとして扱われる一方で、演繹的検証が可能な仮説構成を行っていないのである。

しかしではその扱い方、すなわちインタビューにおける語りをそのまま世界を描写したものとして扱う扱いは、合理的で妥当なものであろうか。この点を考えるために、ここで先の(引用3)を再検討してみたい。

ブルーマーらの説明(引用3-1)は、インタビューの抜粋(引用3-2)のとくに下線部に注目し、そこで述べられている警察の視線が、彼ら

の内省と転向を引き起こしたものと解釈している。すなわち、インタビューにおける語りを文字通り受け取ることにより、「警官全員が自分を注視する」ことが圧力となって転向を促した、というものである。

しかしながら、インタビューの抜粋をよく見ると分かるように、これは「極端な事例の編成 (Extreme Case Formations, 以下ECF)」といわれるものである。ECFとは、会話の中でしばしば聞かれる、「みんな」「いつも」「全然」「完全」「絶対」などの極端な修飾語を伴う事例の呈示によって、その発話の聞き手に対してある特定のバージョンのリアリティ構築を求めることで、発話者の主張を正当化する言語編成である (Pomerantz, 1986)。たとえば、「あなた、いつもパチンコばかり行って、たまには子供の面倒も見てください」という発話の前半部は、世界をそのまま描写したものではありません。なぜなら、他の活動も存在するからである。したがって、この前半部は世界を描写したものではなく、一種の言語行為⁸⁾を行っているものとして考える必要がある。とくにこの場合は、発話の後半部の主張を「正当化するという行為」を行っていると考えることができる。

同じように、(引用3-2)の「いつも (every time)」「どの警官も (every cop)」および「全員 (all)」を伴う発話は、世界をそのまま描写したものとしてではなく、その間に挟まれた部分、すなわちパラフレーズすれば、「それまでの状況に嫌気が差して止めた」という主張を正当化するために編成されていると考える必要がある。それはすなわち、おそらくは、このインタビューが行われた状況において、そのような転向が合理的なものであったということを、調査者であるインタビュアーに受け入れてもらうための言語編成であったと考えられるだろう。

しかもさらに重要なことに、ここにはアイデンティティの問題もかかわっている。ブルーマーらの挙げた社会的類型は、調査対象者自身が認識している社会的類型として、アイデンティティを構成していると考えられる。しかしながら、もしこのインタビューの話者が「暴力系」であることにアイデンティティをおいていたとしたら、この語りは奇妙なことになっている。なぜなら、「警備員が背中に張りついて、それが嫌になる」という感受性は、いわば「通常人 (being ordinary)」(Sacks, 1992: 215)のアイデンティティの一部をなすもの、言い換えれば「暴力系」よりも「通常人」のカテゴリーに結びつく感受性であるからである。ブルーマーらの研究に沿って考えるのであれば、まさに内省的なスタイル (cool style) をもつアイデンティティに結びつく感受性なのである。

したがって、ここで示されているアイデンティティは、通常考えられているような、個人に定着し内面化するような社会的類型ではない。それはいわば、インタビューという相互作用において利用され、さらには達成されるものであると考える必要がある。なぜなら、転向の主張を正当化するために「通常人」あるいは「内省的なスタイル」のアイデンティティに結びつく感受性を用いることによって、現在は「暴力系」ではない「内省的なスタイル」のカテゴリー、すなわち社会的類型に自己を同定していることを、まさにこのインタビューの語りにおいて同時に達成しているからである⁹⁾。

このように、インタビューにおける語りを詳細に再検討すると、ブルーマーらの説明が、合理的ではないということが明らかになる。それはすなわち、語りの信憑性を高めたとしても、それが世界を描写したものとして扱う限り、合理的な説明は成り立たないということを意味しているのであ

る。

7 インタビュー研究とディスコースの分析

では、インタビューにおける語りが世界を描写したものとして位置づけられないとしたら、調査対象者の世界、すなわちこの場合は薬物使用者の世界を、合理的に説明できる方法は、どのように考えられるのだろうか。

おそらくその方法の一つは、先に示した再検討の方法から導き出されよう。それにはまず第一に、インタビューにおける語りの詳細を検討し、その語りが「何をしているのか」を明らかにすることである。それはすなわち、一般的にはディスコース分析の手法を用いることを意味している。

ディスコース分析とはエスノメソドロジー、言語行為論、記号学などを基礎とし、語りやテキストを社会的実践として捉え、それ自体の権利において分析する方法、さらにはそのディスコース実践におけるリソースを分析する方法である (Potter and Wetherell, 1987: Chapter 1 & 2)。伝統的な社会科学の言語観では、語りやテキストはその源にある何らかの世界を表象 (代理) するもの、言い換えれば世界をそのまま描写したものとして捉えられてきた。したがって、たとえば薬物使用者による彼らの世界についての語りは、その語りの対象を表象 (代理) しているものとして扱われ、その意味で語り自体は媒介に過ぎない。しかしながらディスコース分析においては、語りや会話それ自体がリアリティを構築しながら何らかの社会的実践を行なうものとして対象とされる。たとえば、インタビューにおける語りは媒介などではなく、それ自体がその場で自らの主張の正当性を訴えながら、自らのアイデンティティを構築し達成する実践的な過程であると捉える。先に行ったインタビューにおける語りの再検討は、まさ

にそれを分析したのである。

その場合、たとえば、先の再検討でも示したように、薬物使用者たちがどのようにして、どのような言語的リソースを用いて、使用者としてのアイデンティティを達成しているのかを記述し、分析することが方法の一例として挙げられよう。それによって彼らが実際にどのようにして、アイデンティティを編成し達成しているのかが明らかにでき、彼らが行っているまさにそのような作業あるいは実践が、彼らの世界の一端を明示するからである。

第二に、その際に用いられる言語的リソースを収集し、記述することによって、彼らの世界のいわば「幅」を明らかにすることである。

その場合、たとえば先に再検討した (引用3-2) におけるECFを含む発話が示したように、そのフレーズそれ自体は、彼らがそもそも保持している利用可能な言語的リソースから紡ぎだされるものである。先の例でいけば、警察に目をつけられること、買い物もろくにできないこと、これらに事例とするような経験主義的な転向ディスコースのレパトリーが、転向経験の「幅」を明らかにし、同時にまさにそれが彼らの転向経験を構築するのである。これらのように、ある特定の解釈を促す言語的リソースは、彼らが彼らの世界で行う言語的活動において用いられるものでもあり、それらの可能な範囲が、すなわちその有限性が、まさに彼らの世界の「幅」を示すのである。つまり、われわれは、あるいは薬物使用者もまた、少なくとも社会的には、言語的活動によって世界にかかわっている。あるいは逆に言語的活動によってかかわった世界のありようを社会と呼ぶ。なぜなら、行為も、そして行為の前提となる状況の定義もまた、言語的に意味づけられることによって特定のものとして現実化するからである。言い換えれば、世界が外にあって、言語がそれを記述す

るのではなく、言語的活動を通じて世界が立ち現れるのである。つまり、薬物使用者たちに利用可能な言語的リソースが、彼らによる状況の定義を含めた世界の構築を可能にしているのであり、まさにそのような言語的リソースの編成とその実践こそが、彼らの世界なのである¹⁰⁾。

そしてこれらの方法は、「観察可能なデータ」のみを扱うという点で、他の研究者による再分析を可能にし、その意味で更なる合理的な説明に対して常に開かれた方法である。それはすなわち、研究者間において説明の方法として共有可能なものであり、その意味で研究者コミュニティにおける合理性を保証することができると考えられるのである。

8 結び

ここで、これまでの議論を要約しておきたい。本稿は、薬物使用の質的研究において、説明と記述という観点から、科学性あるいは合理性を保証する方法について論じてきた。ここではとくに、方法的にはシカゴ学派の伝統を汲み、テーマ的には薬物使用研究の系譜を持つ、シンボリック相互作用論における二つの薬物使用研究を代表例として扱い、それらの研究における説明の科学性あるいは合理性について検討を行ってきた。そこで明らかになったことは、二つの説明方法の存在である。その一つは、リンドスミスの依存研究に代表されるものであり、実証科学の標準的方法である仮説演繹法を用いた説明方法である。もう一つは、ブルーマーらの薬物使用者研究に代表されるものであり、調査対象者自身の言語的活動を記述し説明する方法である。しかしながら後者の説明方法は、データを詳細に検討することにより、合理的な説明方法としては成立していないことが明らかにされた。そしてその問題点を克服するために、また別の説明方法、すなわちディスコース分析の

手法を導入することが必要であることが示された。

とはいうものの、後者の説明方法、すなわちブルーマーらの研究をはじめとした薬物使用者研究が無価値であるというわけでは決してない。それどころか、リンドスミスやベッカーによる研究のように、調査研究者によって概念構成されていない、いわば「生の語り」の魅力にあふれているといえる。しかもその魅力というものは、実はシカゴ学派とその伝統が備えていたものでもあり、質的研究の利点は、まさにこのような魅力にあるのではないかとさえ思われるのである。

もちろん質的研究の意義とは、そのような、ある意味で感覚的なものだけではない。先の再検討が示したように、それらの研究が、調査対象者の語りを再現しようと努力したデータを提示した研究であったからこそ、使用者の語りを再び詳細に検討して分析することが可能だったのである。その意味で、ブルーマーらの研究の魅力は、きわめて実用的な魅力でさえあるといえるだろう。

以上のように、薬物使用の質的研究には二つのスタイルがあるといえよう。そしてこれは質的研究の中にも、いわゆる「実証派」と「ナラティブ派」の方法的違いが存在していることをも示している。もちろんどちらが正しいか、どちらが優れているかということ、ここで論じることはできないし、その必要もないだろう。社会学的研究を志すわれわれに必要なことは、「観察可能なデータ」を用いながら、説明と記述の科学性あるいは合理性を保証しつつ、調査対象の世界を理解することであるからである。

〔注〕

- 1) その傾向は、実証主義の強さとして表現されるものと軌を一にしているとも考えられよう(宝月, 1996)。
- 2) この場合、説明とは、対象となる現象を継起性や因果性などによって代表される何らかの秩序に基

づいて再叙述することであり、記述とは、対象となる現象の外貌を叙述することである。

- 3) 本稿は2002年10月27日に明治学院大学白金キャンパスで行われた、日本犯罪社会学会第29回大会におけるシンポジウム「[科学的な]犯罪研究の可能性—シカゴ学派を手掛かりにした理論・方法論の再検討—」における筆者の報告「ドラッグ使用を事例にした質的研究—シカゴ学派の伝統の活用—」を大幅に加筆修正したものである。シンポジウムのコーディネーターならびに司会を務められた宝月誠・瀬川晃両先生、および建設的かつ刺激的なコメントと質問をくださったフロアの方々に記して感謝したい。
- 4) 初期シカゴ学派の研究については、(宝月・中野, 1997)ならびに(中野, 2001)を参照。
- 5) 「それほど強くは見られない」というのは、全くないわけではないからである。たとえば、彼は、文献を研究の最初の段階に参照しなかったのは、予断を避けるためであるとしている(Lindesmith, 1968: 7)。
- 6) このような方法は「自然主義」とも呼ばれる(Gubrium and Holstein, 1997)。
- 7) いずれの下線部も原著による。また、文字のルビは筆者による。この(引用3-1)ならびに(引用3-2)は、原著においても一行空気で連続しており、その意味では(引用3)としてまとめるべきであるが、後述の再検討における説明のしやすさから便宜的に、ブルーマーらの説明を(引用3-1)、インタビューの抜粋を(引用3-2)とした。
- 8) 言語行為論によれば、陳述(statement)はなんらかのものごと、事態や事実を記述するもののみあるわけではない。それは「その文を口に出して言うことは、当の行為を実際に行なうことにほかならない」(Austin, 1960=1978:11) 事態を示す場合もある。たとえば、船首に瓶をたたきつけながら行なわれた「私は、この船を『エリザベス女王号』と命名する」という発話は、それがまさに命名という行為を行なっていることにほかならない。ここでは、そのような発話が行っている行為のことを言語行為と呼んでいる。
- 9) これら使用者のアイデンティティに関する再検討については(Widdicombe and Wooffitt, 1995: Chapter 6)を参照。彼らはいわゆる下位文化を研

究対象としているものの、そこでの言語使用に焦点を当ててその世界を明らかにしており、アイデンティティは個人に定着するものではなく、相互作用において、また相互作用によって、交渉され、達成されるものであることを、インタビューの中から明らかにしている。

- 10) シンポジウムでは、これらの方法をなぜエスノメソドロジーと呼ばずに、ディスコース分析と呼ぶのかという質問が出された(宝月・瀬川, 2002)。これは端的にいえば、このような方法はディスコース分析と呼ばれてきたからである。もちろんその影響は受けているが、エスノメソドロジーとは呼ばれてきてはいない。さらに付け加えると、ここでディスコース分析として述べている第一の方法は、確かにエスノメソドロジーの観点をも用いたものであるが、もちろんそれだけを用いたものでもないことは、先のディスコース分析の説明からも明らかであろう。また第二の方法は、ディスコース分析の中でもとくに、解釈レパトリー分析と呼ばれるものであり(Wetherell and Potter, 1992: Chapter 4)、調査対象者がある特定の事柄を説明するのに際して利用可能な言語的リソースである解釈レパトリーを抽出し記述する方法である。したがって、書かれたテキストもまた、ディスコース実践であるとして分析の対象となる。この分析は、英国の社会学者であるギルバートとマルケイによる「酸化的リン酸化」をめぐる科学論争の社会学的研究(Gilbert and Mulkey, 1984=1990)において初めて用いられ、さらにその後、コミュニティ・ディスコースの研究や人種差別ディスコースの研究においても用いられたものであり、エスノメソドロジーではない。そしていずれもが、ディスコース実践とその実践のリソースの分析を対象としているという意味で、ディスコース分析の下位分析方法を構成しており、したがって、エスノメソドロジー的分析と総称することは正確さを欠くと考えられる。逆にエスノメソドロジー的分析と称するのであれば、レパトリアル分析は含まれないであろうし、それであれば、それはディスコース分析として知られているものではない(Potter, 1996)。むしろここでいうディスコース分析は、ギルバートとマルケイの研究によりスタートし、エスノメソドロジーの観点をも取り入れていったものと考えた方が、その発展経緯を端的に

あらわしているように考えられる。

[文献]

- ・ Austin, John L., 1960, *How to do Things with Words*, Oxford University Press. (=1978, 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店)
- ・ Becker, Howard S., 1963, *Outsiders*, Free Press. (=1978, 村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社)
- ・ Blumer, Herbert, with assistance from Sutter, Alan, Ahmed, Samir, and Roger Smith, 1967, *The World of Youthful Drug Use*, School of Criminology, University of California.
- ・ Carey, James T., 1968, *The College Drug Scene*, Prentice-Hall.
- ・ Carey, James T. and Mandel, Jerry, 1968, "A San Francisco Bay Area "Speed Scene"" *Journal of Health and Social Behavior* 9(2): 164-74
- Colomy, Paul and J. David Brown, 1995, "Elaboration, Revision, Polemic, and Progress in the Second Chicago School", Gary A. Fine (ed.), *A Second Chicago School?*, University of Chicago Press: 17-81
- ・ Davis, Fred, and Munoz, Laura, 1968, "Heads and Freaks: Patterns and Meanings of Drug Use Among Hippies" *Journal of Health and Social Behavior* 9(2):156-63
- ・ Faris, Robert E.L. and Dunham, H. Warren, 1939, *Mental Disorders in Urban Areas: An Ecological Study of Schizophrenia and Other Psychoses*, University of Chicago Press.
- ・ Gilbert, G. Nigel, and Mulkay, Michael, 1984, *Opening Pandora's Box: A Sociological Analysis of Scientists' Discourse*, Cambridge University Press (=1990, 柴田幸雄・岩坪紹夫訳『科学理論の現象学』紀伊国屋書店)
- ・ Gubrium, Jaber F., and Holstein, James A., 1997, *The New Language of Qualitative Method*, Oxford University Press
- ・ Hanson, Norwood Russell, 1969, *Perception and Discovery: An Introduction to Scientific Inquiry*, Freeman Cooper (=1982, 野家啓一・渡辺博訳『知覚と発見：科学的探究の論理』紀伊国屋書店)
- ・ 宝月誠, 1996, 「逸脱理論における「実証主義」支配」北川隆吉・宮島喬 (編)『20世紀社会学理論の検証』有信堂: 137-56
- ・ 宝月誠・瀬川晃, 2002, 「質問と議論の総括」日本犯罪社会学会『日本犯罪社会学会第29回大会報告要旨集』: 8-9
- ・ 宝月誠・中野正大 (編), 1997, 『シカゴ社会学の研究—初期モノグラフを読む—』恒星社厚生閣
- ・ 金子雅彦, 1997, 「精神障害と社会環境」寶月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣: 522-46
- ・ Lindesmith, Alfred R., 1938, "A Sociological Theory of Drug Addiction" *American Journal of Sociology* 43(4): 593-609
- ・ ———, 1947, *Opiate Addiction*, Principia Press.
- ・ ———, 1968, *Addiction and Opiates*, Aldine.
- ・ ———, 1981, "Symbolic Interactionism and Causality" *Symbolic Interaction* 4(1): 87-96
- ・ Mead, George H., 1917, "Scientific Method and Individual Thinker", Dewey, John (ed.), *Creative Intelligence: Essays in the Pragmatic Attitude*, Holt, Rinehart and Winston.: 176-227
- ・ 中野正大 (編), 2001, 『シカゴ学派の総合的研究』平成10~12年度科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 10410045)
- ・ 野家啓一, 2001, 「「実証主義」の興亡—科学哲学の視点から—」『理論と方法』16(1): 3-18
- ・ Pomerantz, Anita, 1986, "Extreme Case formations: A way of legitimating claims" *Human Studies* 9: 219-30
- ・ Popper, Karl R., 1972, *Objective Knowledge, The Clarendon Press*. (=1974, 森博訳『客観的知識』木鐸社)
- ・ Potter, Jonathan, 1996, "Discourse analysis and constructionist approaches: theoretical background", Richardson, John T.E. (ed.), *Handbook of Qualitative Research Methods for Psychology and the Social Sciences*, BPS Books: 125-40
- ・ Potter, Jonathan, and Wetherell, Margaret, 1987, *Discourse and Social Psychology: Beyond Attitudes and Behaviour*, Sage.
- ・ Sacks, Harvey, 1992, *Lectures on Conversation volume II*, Blackwell.
- ・ 佐藤哲彦, 1997, 「社会過程としての〈ギャング〉」寶月誠・中野正大編『シカゴ社会学の研究』恒星社厚生閣: 251-91
- ・ 佐藤哲彦, 2001, 「アルフレッド・R・リンドスミス

と科学的方法—初期シカゴ学派と第二次シカゴ学派のあいだで—」中野正大編『シカゴ学派の総合的研究』:235-51

- Sutter, Alan, 1966, "The World of the Righteous Dope Fiend" *Issues in Criminology* 2(2): 177-222
- Thrasher, Frederic M., 1927, *The Gang: A Study of 1313 Gangs in Chicago*, University of Chicago Press.
- Whetherell, Margaret, and Potter, Jonathan, 1992,

Mapping the Language of Racism: Discourse and the Legitimation of Exploitation, Columbia University Press

- Widdicombe, Sue, and Wooffitt, Robin, 1995, *The Language of Youth Subcultures*, Harvester Wheatsheaf.

E-mail: akis@gpo.kumamoto-u.ac.jp

On the Accounts and Descriptions in the Qualitative Researches of Drug Use : Scientific/rational methods in Symbolic Interactionism and the Analysis of Discourse

Akihiko Sato
(Kumamoto University)

This paper examines the methods of qualitative research of drug use in terms of its rationality, especially with two research in the School of Symbolic Interactionism. One is research on opiate addiction done by Alfred R. Lindesmith (1938, 1947, 1968), and another is on the world of drug users done by Herbert Blumer and his assistants (1967). Lindesmith's work used his own observations, interviews with addicts, and many documents which describe addiction in order to analyze the process whereby people become addicted. He adopted the analytic induction to formulate the theory of addiction. This procedure is approved as scientific and rational, because the analytic induction is not a genuine induction but a hypothetico-deductive method, the standard method of the positive science. Blumer's work also used interviews with drug users to analyze several careers of drug users, but the accounts in his work are revealed as non-rational as a result of the re-analysis of the data which he shows in his work. Finally this paper suggests that we can adopt the methods of Discourse Analysis to guarantee the rationality of the analysis of the drug users, especially with interview data.

Key words; drug use, Symbolic Interactionism, Discourse Analysis

E-mail: akis@gpo.kumamoto-u.ac.jp